

# 角膜實質炎ニ因スル角膜脂肪變性ノ病理組織ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38029">http://hdl.handle.net/2297/38029</a>

有効ナリ。

一、先端ハ卵輪狀ニシテ狭小ナルニヨリ能ク内外眦部ニ適合ス。

一、先端有溝部ハ挾合力大ナルニヨリ結膜組織ノ肥厚シテ退行變性セルモノ、上層ヲ能ク除去スルコトヲ得。

一、有溝部ト雖モ總テ鈍狀ヲ保ツニヨリ使用ノ際角膜結膜ヲ損傷スルノ憂ナシ。

使用上ノ注意

一、内外眦部ニ向ツテハ鑷子ヲ縦ニ又タ横ニ使用スルコトモ其場合ニ適應スル様ニ爲スベシ。

一、一個ノ顆粒ヲ除去セントスレバ鑷子先端有溝部輪内ニ嵌入シテ摘壓スベシ。

一、多數ヲ除去セントスレバ反轉セル眼瞼結膜ヲ鑷子兩葉卵輪狀部ニテ搾壓シテ適度ニ索引スレバ宜シ。

終リニ諸賢ノ御試用ヲ仰ギ改良スベキ點御指導アラントラ切望ス。

(本店ハ東京市本郷區春木町二丁目半田屋器械店ヨリ

發賣ス)

## 角膜實質炎ニ因スル角膜脂肪變性ノ病理組織ニ就テ

金澤醫專眼科

栗山光太郎(大正三年卒業)

今秋一患者高度ノ角膜脂肪變性ヲ呈スルモノヲ見其ノ脂肪變性ハ角膜實質炎ノ後ニ起レル薄葉實質ノ變性ナルヲ知ルヲ得タルヲ以テ敢テ淺學ヲカヘリミズゴ、ニ餘白ヲ汚サントス

患者。野村某。四十九年。無職。

大正四年十月三日初診

既往症 患者生來健全ナリ十一才ノ時兩眼殆ソド同時ニ眼球結膜發赤シ漸々角膜ニ曇リナ生シ暫クニシテ全ク盲目トナレリ。發病以來兩眼トモ疼痛甚ダシカリシガ二三ヶ月ノ後毎日晝ヲ兩眼瞼部ニ貼シ約四ヶ月ノ後諸症狀輕快シ時ト、モニ漸ク物ノ形ヲ辨シ獨行シ得ルニ至リ今日ニ至ルマテ其ノ當時ノ視力ノマ、經過ス。

八九年前耳疾ニカ、リ何時トハ知ラズ漸々ニ難聽チ來タシ一二年ノ後ニハ全ク聾トナリヌ。同胞七人一名ハ五六才頃他ノ一名ハ十八才ノ時不明ノ疾病ニテ死亡シタル外ハ皆五十年代マテ健存シ早産流産等ナシ。

現症 兩眼眼瞼縁ヤ、發赤シ眼瞼結膜ニモ輕度ノ充血アレドモ乳嘴ノ肥

大或ハ「トラホーム」又ハ其ノ癥痕等ヲ認メズ結膜分泌物中ニハ「キセロ  
ーゼ」桿菌ノ外何回檢スルモ他ノ菌ヲ見ズ。

右眼角膜ハ全部ニ互リテ恰モ網工ヲ見ルガ如ク又ハ雲ノ如ク灰白色ノ濁  
ヲ呈シ其ノ濃キ部ト淡キ部トヲ以テ其ノ間極メテ小ナル透明部ヲ點狀  
ニ四五個所殘スノミ。此ノ濁濁ハ雙眼角膜顯微鏡ヲ用キテ精細ニ檢スル

モ特殊ノ造構ヲ認メズ極メテ微細ナル粉末狀ノ濁濁濃淡種々ノ度ニ集團  
シテ或ハ淺ク或ハ深く存シ時ニハ深淺相重ナリテ其ノ間ニ透明ナル部ヲ  
挾ムモノアリ。濁濁ノ濃厚ナル部ニ於テ所々殆ンド透明ナル細キ線狀部

ガ或ハ分岐シ或ハ結合シテ存スルモノアリ之レ吸收期ニ於ケル新生血管  
ノ跡ナラン肉限的透明ナル部ト雖モ全ク濁濁ヲ有セザル部ナシ。周圍蹄

係網ヨリ細小ナル血管進入スルモ何レモ淺在性ニシテ左程多カラズ深部  
ニ於テハ僅カニ一二ヲ見ルノミ左角膜モ大體ニ於テ右眼ノ所見ト同様ナ

リタゞ彼ヨリモヤ、濁濁淡キノミ兩眼トモ角膜表面ハ平滑ナレドモプ  
ラチドー氏輪ハヤ、不正ノ線トナリテ現ハル。

虹彩ハ角膜ノ比較的透明ナル部ヨリ望見スルヲ得ベク兩眼トモ其ノ色澤  
其他ニ於テ著變ナシト雖モ光線反應遲鈍ニシテ瞳孔ハ不正圓形ヲ呈ス然

レドモナホヨク「アトロピン」ニ反應ス。

左眼ヲ徹照スルニ大小ノ黑影硝子體內ニ浮動スルヲ認メ僅カニ認メ得ル  
乳頭ノ顛顛側ニ於テ約同大ノ灰白色ノ境界ノ明瞭ナル半月狀ノ「コーヌ

ス」ヲ認ム。其他網膜ニ於テハ充血滲出物ナク中等度ノ近視性色素消耗  
存スルノミ。右眼モ徹照スルニヨリテ硝子體濁濁アルヲ知ルヲ得タレド  
モ眼底ハ之レヲ認ムルコトヲ得ズ。

視力。2/16。右手動。

大正四年十月四日右角膜外縁ニ近ク巾サ二耗半長サ三耗ノ厚サデツセメ  
ツト氏膜ニ達セザル範圍ニ於テナルベク深ク(○・四耗)角膜ノ一小片ヲ  
切除シ直チニ氷結「ミクロトーム」ニテ薄切シ「ヘマラウン」<sup>II</sup>「ヘマトキシ

リンエオジン」<sup>III</sup>「プダグ」<sup>II</sup>ヲ以テ染色シ殘部チ一%「オスミウム」酸中ニ  
投シタリ。

之レヲ鏡檢スルニ變化ノ主在部ハ角膜薄葉ニシテ上皮細胞ハ其ノ變化極  
メテ少ナク六層乃至八層ニシテ其ノ排列整然タリ唯一ノ變化ノ存スル部

ハ基底細胞ニシテ二三ノ細胞ハ空泡様ニ一倍半乃至二倍大ニ膨大シ中央  
ニ極メテ染色性弱キ核ヲ有ス中ニハ全ク核ヲ有セザルモノアリ此ノ部

ハ「ヴァン、ギーソン」氏染色法ヲ用キタルモノニ於テハ微細ナル結締組織  
維ノ進入セルヲ認ム其ノ他細胞ハ全ク健常ニシテ稀ニ基底細胞下部ニ

於テ微細ナル油浸裝置ニヨリテ漸ク認メ得ベキ脂肪顆粒ヲ含ムモノアル  
ノミ。

角膜實質ハ變化ノ最モ著明ナル部ニシテ「ヘマトキシリンエオジン」又ハ  
「ヘマラウン」ヲ以テ染色セルモノハ各薄葉ハ排列不正ニシテ角膜小體ガ

或ル部ニ於テ極メテ少ナクシテ他ノ部ニ於テハ其ノ數ハ尋常ナルモ形狀  
不正ニシテ「コンマ」狀ノモノ楕圓形ノモノ斜走スルモノ等アリ一般ニ膨

大シテ突起ナク該染料ニ對シテ染色力微弱ナル外ニハ變化ヲ見出サズト  
雖モ「スタン」ヲ以テ處置セルモノヲ見ル時ハ角膜薄葉ハ殆ンド全層ニ互  
リテ脂肪顆粒ヲ見ル即チ「スタン」<sup>III</sup>ニヨリテ赤變セル脂肪顆粒ハ極メテ  
小ナル粉末狀ヲナシテ薄葉内ニ充滿シ薄葉間ニハ殆ンド之ヲ認メズ。角

膜小體內ニハ油浸裝置ヲ以テスルモ之ノ顆粒ヲ認メズ其ノ核ニ密接スルモノアレドモ核内ニハ存セズ。薄葉ノ某一部分ハ脂肪粒ヲ含マズ此ノ部角膜小體ノ數尋常ニシテ其ノ排列不正ニ形狀多樣ナリ。ヘマトキシリン「エオジン」又ハ「ヘマラウン」標本中角膜小體少ナキ部ハ實ニ脂肪變性ノ著明ナル部ニ相當シ角膜小體ノ膨大スルコト染色性ノ少ナキコト及ビ排列不正ナルコト等ハ他ノ部ト異ナラズ

薄葉ノ排列ハ一部波狀ヲ呈シ此ノ部間腔可也廣メラルト雖モ其ノ間全ク空虛ニシテ二三小脂肪滴ヲ見ルノミ思フニ之ノ空隙ハ薄切時ニ人工的ニ生ジタル變化ナルベシ他ノ大部分ハ其ノ排列正シク間腔尋常ニシテ同シク僅カク脂肪滴ト角膜小體存スルノミ「ボーマン」氏膜ハ全標本ヲ通ジテ之レニ類似セル部ヲモ認メズ角膜上皮ハ恰カモ直接薄葉ノ上ニ座スルノ觀アリ。上皮直下ノ薄葉ハ僅少ノ部ノ外脂肪顆粒ヲ全ク有セザル略「ボーマン」氏膜ニ一致スル特殊ノ一層ヲ形成シ他ノ薄葉ト全然別ノ趣ヲ呈ス即チ此ノ部ハ殆ンド健常ノ角膜小體ヲ有シ其ノ核染色性佳良ニシテヤ、正シク薄葉ト共ニ横走シ長キ突起ヲ有ス一部其數ノヤ、多キ又ハ方向或ハ形狀ノ不正ナル部アリ薄葉自己ハ纖維性造構ヲ呈ス。

同月十八日再ビ右角膜中央部ニ於テ大キサ三平方厚〇、三耗ノ一小片ヲ切除シ十%「フォルマリン」液中ニ一晝夜水洗後之レヲ切半シテ一部ヲ一%「オスミウム」酸ニ投シ他ノ一半ヲ凍結裝置ニヨリテ薄切セリ染色法前同同様ニシテ鏡檢セシニ其ノ變化一回ノト大差ナシ上皮基底細胞ノ約半數ハ空泡樣ニ變シ薄葉ノ排列整然トシテ其ノ中ニ脂肪顆粒ハ前回ノヨリモ更ニ微小ニシテ油浸裝置ニヨリテ始メテ一個一個ヲ區別シ得ベシ。

此ノ標本ニ於テ「ボーマン」氏膜ヲ認メズ角膜上皮直下ノ薄葉ノ造構ハ前回同様ナリ其他ノ所見モ全ク前回ト異ナラズ脂肪ノ化學的性質ニ就テハ材料ノ少ナキタメ殘念ナガラ充分ニ之レヲ檢スルヲ得ザリシガ強度「アルコホール」・「エーテル」・「クロロフォルム」ニヨリ溶出シ重「クロム」酸加里ヲ以テ處置セラレタルモノニ於テハ、「アルコホール」ニ溶解スルコト困難トナリ「スタン」ヲ以テ淡ク染色セラル「オスミウム」酸ニヨリテ黑變セル顆粒ヲ認メザリキ。之レ余ノ使用セル「オスミウム」酸ハ新鮮ナラザリシガ爲ナラン。

### 以上ノ組織的變化ノ主ナルモノハ角膜實質ノ脂肪變性

「ボーマン」氏膜ノ消耗ニシテ角膜薄葉内ノ脂肪成分ハ「テュル」氏及ビ我が高安先生ノ例ノ如ク薄葉自己ノ變質セルモノニシテ浸潤セルモノニアラザルベキハ薄葉間腔ニ殆ンド全ク脂肪滴ノ存セズ小體核染色性ノ減退セルヲ見ルモ想像シ得ベシ。余ノ標本ニ於テ見ル所ハ殆ンド完全ニ「テル」氏及ビ高安先生ノ特發性脂肪變性ノ例ニ於ケル所見ト一致スルモノニシテタゞ此ノ二者何レモ「ボーマン」氏膜ノ變化余ノ例ノ如ク高度ナラザリシ如シト雖モ一部分ニ於テ余ノ例ト同様ノ變化ハ存セシナリ。余ハ然レドモ余ノ例ヲモ之レニ一致セシムルヲ得ザルヲ遺憾トス。ムシロ角膜實質炎後ノ脂肪變性ナラント思惟

スルハ不完全ナル既往症ニアリテ(患者ハ内耳疾患ヲ有シ全然タル聾ニシテ僅カニ片假名ヲ用キテ對話ヲナシ得ルニスギズ)發病當時可也高度ノ刺戟症狀ガ四五ヶ月間持續セシコト明カニシテ一時全ク盲目トナリシモノガ再ビ或ル程度マデ視力ヲ恢復シタルナリ。モシ最初ヨリ脂肪變性ヲ起シタルモノナランニハ經過中ニ於テ變性ガ停止スルノミカ視力ノ恢復スル程ニ治ニ向フ事ナキハ疑フノ餘地ナカラシム且ツ脂肪變性竈ハ廣ク角膜全面ニ亙リ虹彩ニ現今ニ於テハ刺戟全クナシト雖モ瞳孔形狀ノ不正圓形ナルハ既往ニ於テ角膜實質炎ニシバ、併發スル虹彩炎ヲ想像セシムベク硝子體ノ溷濁モ近視ニ原因セズトセバ虹彩ト共ニ脈絡膜ノ犯サレタルヲ想像シ得ン則チ余ハ本例ヲ角膜實質炎後ノ脂肪變性ト看做ス所以ナリ。

角膜實質炎ノ多クガ殆ンド透明ナル角膜ニ恢復スルコトハ暫ク臨床ニ與カルモノ、等シク認ムル所ナレドモ其ノ吸收ノ速カナラザルモノハ二年乃至三年ヲ費スモナホ溷濁ヲ殘シツヒニ全ク恢復ノ望ナキモノ、存スルコトモ既知ノ事實ナリ此ノ種ノ白斑ガ癍痕組織ナルカ又ハ退行變

性ナルカハ以下論ゼントスル所ニシテ炎症性細胞浸潤ニアラザルコトハ論ズルマデモナシ

炎症ハ不適當ナル生活要約ニ對スル生活反應ノ著明ナル發現ニシテ必ず一定ノ經過ヲ經テ終末スルモノナリ癍痕組織退行變性等ハ實ニ其ノ終末產物ニシテ其ノ何レヲ殘スカハ組織臟器ノ種類炎症ノ性質荒蕪ノ程度等ニヨリテ異ナル可シ。

エルシニツヒ氏ハ角膜實質炎ノ恢復期ニ於ケル血管ハ全ク結締組織殊ニ癍痕形成ニ關與セズ全然角膜小體ノ増殖ニヨリテ後者ノ如キ薄葉ヲ形成ストナセリ。

本例ニ於テハ薄葉ノ排列整然トシテ角膜小體反ツテ少ナク全ク圓形細胞又ハ癍痕組織ヲ認メズ恰モ健康角膜ノ直チニ變性セルノ觀アリ。エルシニツヒ氏ノ例ニ倣ヒテヨク説明スルヲ得。

既往症ニ於テ殆ンド盲目トナリシ時ハ角膜小體ノ分體増殖及ビ壞死變性ノ最モ盛ナリシ時期ニシテ一程度ノ視力恢復ヲ來セルハ第二回ノ角膜小體ノ増殖遊走ニヨリテ整然タル薄葉ヲ生ジツ、アル時期ナリシナリ此ノ時期ニ引キツバキ新生薄葉ハ炎症後ノ營養ノ急變ニアヒ漸々脂肪

